

市では、市内の学校に通う児童・生徒に小諸のことをより知ってもらうため、副読本として「こもろヒストリー」を作製しました。ここでは、その一部を連載してお伝えしていきます。

明治5年に群馬県にできた富岡製糸場で働いた女工さんの出身地で一番多かったのは、小諸でした。

明治22年に「純水館」が小諸にでき、約100年、小諸は「糸のまち」として栄えました。富岡製糸場で学んだ女工さんが中心になったので、品質のいい生糸が作られ、海外でも高く評価されました。

ほとんどの農家が蚕を飼っていました。畑には桑の木が植えられ、蚕を飼う時期になると、農家は畳を取り外して、板の間にしました。そこに「たな」をすえつけて蚕を飼いました。

室内の温度を上げるために、部屋のなかで火をたくことがあり、そのため、煙を出す「煙出し」が屋根の上についていました。今でも、そのあとを残している農家があります。

煙出しの屋根



蚕の卵（蚕種）は、冷蔵庫のように低い温度で保管しておく必要があります。

天然の冷蔵庫ともいえる「風穴」を活用した施設「氷室」が大事な役割を果たしました。

そこでは、温度が一年中冷蔵庫のチルド室に近い状態になっていました。

氷室は三方を石組みにして、小屋を建てたものです。

氷地区にはいくつもの「氷室」があって、そのうちの一つは、今でも使われています。

HISTORY No.7

糸のまち・小諸



純水館製糸場と従業員



氷地区にあった「氷室」



小諸学
KOMORO GAKU

超大作

全12回

私が住むまち

小諸の歴史

K O M O R O
H I S T O R Y
歴史の なかに、 未来の ひみつが 横た わっている

こもろ未来プロジェクトシリーズ